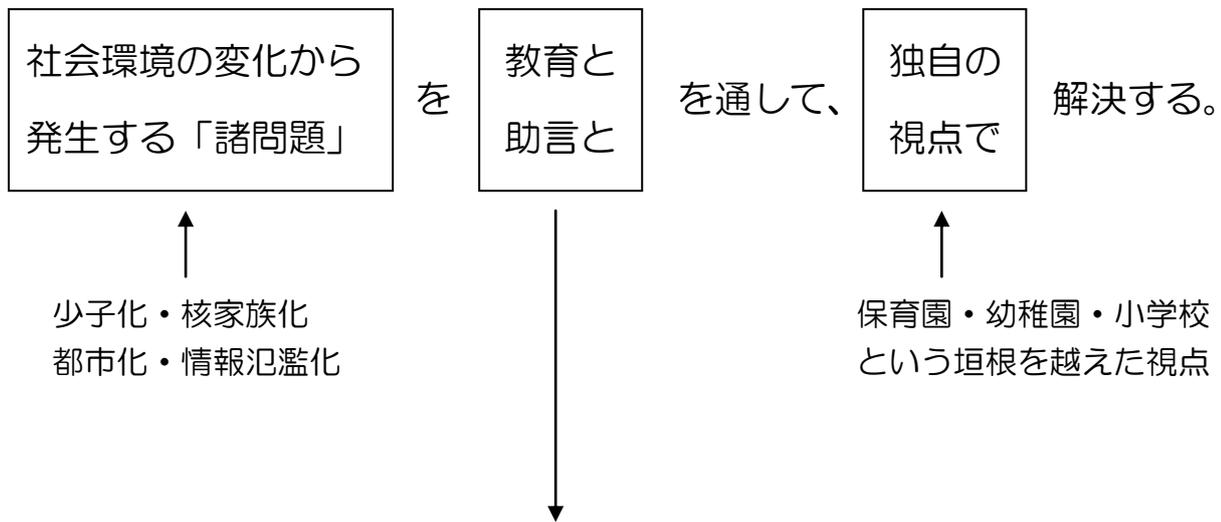


自 平成 26 年 4 月 1 日

至 平成 27 年 3 月 31 日

## 平成 26 年度 事業報告書



1. 教育事業（教育実践を通して）

- (1) 人と関わる力の育成（幼児とその親）…………… 2
- (2) 考える力の向上（幼児・児童）…………… 3
- (3) 体を動かす力の習得（幼児・児童）…………… 4

2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

- (1) 育児・教育に関する相談と助言…………… 6
- (2) 実践研究とその成果の公開…………… 6

3. その他（地域社会への還元）

- (1) 文化的活動の「場」の提供…………… 7
- (2) 震災時に避難する「場」の提供…………… 7

## 1. 教育事業（教育実践を通して）

前記スタンスに基づき、下記のような教室を設置し、社会的諸問題の解決に当たった。

（参加人数は最多在籍時の数値）

### （1）人と関わる力を育成する教育

### 公益目的支出事業①

#### ■はじめての教室（対象：1歳～3歳の幼児とその親）

【内容】 他の親子と継続的に関わりあう「場」を設定し、広々とした環境の中でクラス担任のリードの下、幼児には遊びを通して社会性を身につけさせ、親には適宜、アドバイスをしたり勉強会を開催したりしながら子育てに関する不安を解消させる。

【結果】 当年度も多くの親子が上記の狙いに沿って活動に参加した。しかし、最近では、当スクール以外に幼稚園の受験塾にも通う、いわゆる「ダブルスクール」の子どもがいるようだ。公立の小中学校のいじめがマスコミなどで採り上げられ、その不安は、親をして早くから私立の幼稚園に通わせたいという気持ちにさせるのであろう。しかし、それまで伸び伸びと活動していた子どもが、ある日突然、神経質になったり、自信なさそうなそぶりを見せたりするため、原因を調べてみると塾通いが始まったということが少なくない。

受験塾が全て悪いとは言わないが、幼い子どもに不要な圧力がかかってしまうような塾に通うことは止めさせたいところである。保護者も決して塾通いが良いとは思っておらず、やむを得ずといった感であるが、それにより、子ども本来の成長を阻害してしまうことは避けさせたい。

参加者 親子 144 組

内 訳 1歳児親子 51組（週1回・年33週の保育）

2歳児親子 60組（週2回 or 3回・年33週の保育）

3歳児親子 33組（週3回・年33週の保育および  
2泊3日の親子合宿）

保護者に対する指導 1歳児保護者対象に年7回の育児指導

2・3歳児保護者対象に年5回の育児指導および  
社会教養、進路などに関するレクチャー

希望する保護者に対する個別のカウンセリング  
を延べ205人に実施。

## (2) 考える力を向上させる教育

### ■言語力UP教室（対象：3歳～5歳の幼児）

【内容】 将来、論理的思考ができる人間に育てるため、「幼児なりに」筋道を立てて物ごとを考える経験をさせておく。

【結果】 遊びの中で科学的な現象に触れさせたり、道具の工夫されているところに気づかせたりして、その現象や仕組みを言葉にさせる活動や、社会的な事象を考えるための素材として生かす活動を行った。

今年度は、思ったことについて「理由」を付して話すことに力を置いて指導した。たとえば、エレベーターの標識としての構成要件を満たしているかどうかを考えさせる授業では、写真①のように矢印のない標識を見せ、なぜこれではエレベーターの標識として不完全なのかを説明させた。図を見た3歳児は、皆の前で「上向きと下向きの矢印が付いていないからだめ。」と理由を付して説明することができた。今後も、このような課題を用いて、幼児なりに理由を述べる習慣をつけさせていきたい。

参加者 幼児 102人

内 訳 3歳 45人（週1回・年35回）

4歳 34人（週1回・年35回+2日の夏季授業と言語力診断）

5歳 23人（週1回・年35回+2日の夏季授業と言語力診断）

### ■発信力UP教室（対象：小学生）

【内容】 「書く」ことで思考力を高めさせる指導を行った。特に、資料を分析したり、現象を把握したりして、その内容を文章化するための「観察力」と「分析力」を育てるとともに、それを論ずるための『型』を指導した。

【結果】 当年度は、担当者が「はじめての教室」「言語力UP教室」などの支援に回ったため、教室を開設できなかった。

## ■学習力UP教室（対象：小学生）

【内容】じっくりと考える時間を与え、的確なヒントを与えることで「学ぶ」こと、「考える」ことの楽しさを感じ取らせ、子どもが本来もっている学習意欲を復活させる。また、軽視されがちな繰り返し学習の大切さを理解させ、習慣づけさせることを狙った指導も行う。

【結果】常設教室では個別にじっくり指導した結果、基本的な学力がしっかりと身についた。また、夏季教室では小集団で他者の意見もよく聞いて考えることで、物事を多角的に見る経験もさせられた。

参加者	常設教室	小学生 11 人	（週 1 回・年 35 回）
	夏季教室	小学生 22 人	（夏休み 6 日間集中）

### （3）体を動かす力を習得させる教育

## ■体育教室（対象：2歳児～児童）

【内容】幼児には、歩く・走る・投げる・回るなどの基本的な体の動きが「満遍なく」できるようにし、「体を動かすことの楽しさ」を幼児期に覚えさせる。

児童には、自分の体を操る基本的能力を「いろいろな運動」を通して身につけさせ、運動に対する「苦手意識」を持たせないようにする。

【結果】幼児には、ただ単に「走る」「投げる」「回る」などの動きを体験させたのではなく、将来、体験する「全力疾走」「走り幅跳び」「走り高跳び」「ボールゲーム」「器械体操」などの動きを想定した「遊び」に運動を仕立ててあるため、小学生になったときに「種目」への取り組みも円滑になったことが確認された。児童には「器械体操」系の種目を中心に指導した。楽しく自分の力に応じた上達を促すことで、自信をつけさせることができた。

参加者	幼児	142 人	（週 1 回・年間 35 回＋夏季集中授業 4 日）
	小学生	57 人	（週 1 回・年間 35 回＋夏季集中授業 6 日）

## ■剣道教室（対象：小学生・中学生）

【内容】 剣道を通して心身ともに自己を強く逞しくする。

【結果】 稽古では「皆に合わせる」ことを重視し、号令に合わせて体操をする、竹刀を振るといった基本動作から、「相打ちの面」などの基本打突、木刀による基本稽古技まで、相手に合わせることを強く求めた。

当年度は久しぶりに女兒（小1）の参加を見た。10名の男児の中にたった1名であったが、人一倍の稽古を重ね、年度末の内部試合では初心者の部で優勝するに至った。

参加者 小学生 11名 （週1回・年35回）

## ■児童サマースクール（対象：小学生）

【内容】 自然に触れること、および、宿泊を伴う団体生活をする中で、自然に親しませ、身の回りのことを自力で行なう力を育てることをねらいに、清里高原で2泊3日の合宿を行った。

【結果】 今年はヤマネの観察をメインの活動に据えたが、天候不順で見ることができなかった。しかし、着替えや入浴など、日常生活では親の力に頼りがちな入浴の準備や片づけなどを自分で行うという「自立」に関する領域では目標を達成することができた。

参加者 小学生 16名 （夏休み2泊3日）

## 2. 相談・助言事業（解決方法を研究し、成果をより多くの人に）

### （1）育児・教育に関する相談および助言

### 公益目的支出事業②-1

【内容】 以下のような形で育児や教育に関する相談を受ける。

- ①前記教室に参加する親からの相談を、教室以外でも随時受ける。
- ②教室に通えない親の電話相談や来訪相談等にも応じる。

【結果】 前記教室に通っている保護者からの相談は前述（p3）のように延べ205件受けたが、教室外からの相談は今年度はなかった。

### （2）実践研究とその成果の公開

### 公益目的支出事業②-2

#### ①帰国外国人児童生徒教育の支援

【内容】 日本語力が不十分な児童生徒の言語習得、教科学習フォローの仕方について、小中学校等の教員の研修をする。

【結果】 平成26年度は以下のような団体に出向き、研修を行った。

東京都教委・埼玉県教委・（独）教員研修センター・葛飾区教委・京都市教委・古河市教委・東京外大・愛知教育大・学習院大学・伊勢崎市教委・松阪市・香川県NPO・富里市NPO・郡山市NPO・町田市国際交流センター・新宿未来創造財団・兵庫県国際交流協会の全17回865人に研修をした。

#### ②研究・調査とその公開

【内容】 国立教育政策研究所の委員として外国人児童生徒の散在地域における支援の在り方の研究を行った。昨年、iPadを使った母語による教科学習支援のためのテキストを作成し、母語話者に提供した研究活動を元に、当年度は研究報告書を作成した。

【結果】 外国人児童生徒が散在する地域での指導に関する教育行政の在り方をまとめ、具体的な教育政策案を提出した。

#### 研修会受講者アンケートより

- ・事例をたくさん挙げながらご指導いただけて本当に勉強になりました。丸一日、この講義を聞いていたくらいでした。具体的で自分が求めているものでした。
- ・多くの具体的事例では講師の先生の手元に引きつけられた。（反復練習を単純なものにしないための）「変化のある繰り返し」とはどういうことかよく分かった。

\*平成26年11月実施の（独）教員研修センター主催の受講者アンケートより抜粋

### 3. その他（地域社会への還元）

財団の事業としては位置づけていないが、必要に応じて次のような協力をした。

#### （1）文化的活動の「場」の提供

【内容】近年、地域の人々の文化的活動が活発になってきているにも拘わらず、公民館などの公共の場の確保が難しくなっている。そこで、活動の場を無償または実費で提供することで、文化的活動のサポートを行った。

【結果】会員の同好会への会場提供

ヨーガの会	年 33 回 (8 人)
ブリッジの会	年 34 回 (9 人)
書の会	年 29 回 (10 人)

#### （2）震災時に避難する「場」の提供

【内容】耐震化を進め、震災時に地域の人々の避難場所となるようにする。

【結果】今後、予想される東京直下型の地震の時は、会員でも相当多くの帰宅困難者が出るほか、歩いて帰宅する一般住民が途中で帰宅を断念し、宿泊する場所を必要とすることも考えられる。そのような事態に対応できるよう毛布や食料などの備蓄量を増やす方向で検討を進めている。今年度は幸いにもこの協力をしなくてもすんだ。